

詩

奨励賞

まる
○と
ぼう
ーと
かぎ
ㄣと

材木町 牧野 逸子

大きくて眞つ黒な

まる ぼう
○とーとㄣが

朝の歩道に躍る

四つにたたまれて 十の字にくくられて

どざり と傾いている これは

まぎれもない新聞だ 百部もあるか

新聞ならば早く配らねば

陽はもう高い

ゆき交う沢山の足が迷惑そうに

脇へ寄ったり 跨いでいたりする

そうだ この街は隣り国の名を被せられ

コリアンタウンなどと呼ばれる

カツと熱くて辛い飯屋が沢山ある

多分 今頃は昼食の仕込みの眞最中

やがて押し寄せる此の国の人彼の国の人

私のような旅人も多い

翌日 まだ眠っている街に朝食をさがす

安価な一汁三菜の盆が和食だという

コーヒーは別料金だと 省略した舌づか

い

一生懸命言う 女の子

和の店に もはや早起きする人は

いないらしい

夕方 この街は黒い服と車のヘイトに耐

える

まる ぼう
○とーとㄣで出来た新聞は

陽のあるうちに読まれたのだろうか



私の夏

材木町 牧野 逸子

プランターに一本のミニトマトを植えた
三年目の正直 今年はそのしかった
この苗の能力を どれ程生かしたのかは
解らないまま

昨夜のトギ汁を朝に注ぐ

陽を追ってプランターを少し廻す

大きく枝分れして

たのしそくに振る腕を支柱につかまらせ

る

五分間ばかりの会話

目覺めに 小窓からのぞくと

古い家並みを縫って来る光をうけ

るうそくのように灯るあかり

燃える色まで待てないで 手を出してし

まう

ゴメンネとぼろりと口に入れる